ティー・ブレイク

NO. 96

大阪城と江戸城の石垣

何年か前になるが，韓国の大学教授が我が家に泊まることになり，その時豊臣秀吉が唐辛子でもって韓国人を殺そうとしたが，殺されるどころか元気になって，それは，後にキムチ料理に発展したという歴史の一遍をきいた。

文化には温度差があって，韓国から日本へ伝来された食文化が散見されるが，その逆のケースの一つが唐辛子である。

また，川原俊夫，千鶴子夫妻が釜山から博多に引き上げてきた後に，辛子明太子を発明したのであるが，彼は周囲の特許出願の勧めにも頑と首肯せず，引揚者の自分に暖かく励ませてくれた人たちに報いるのには辛子明太子を無料で開放するのが一番と考えて，特許では儲けないという信念を貫いたそうである。宮沢賢治の『雨ニモマケズ　風ニモマケズ　雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ丈夫ナカラダヲモチ　慾ハナク……北ニケンクワヤソショウガアレバツマラナイカラヤメロトイヒ　……ミンナニデクノボウトヨバレ　ホメラレモセズ　クニモサレズ　サウイフモノニ　ワタシハ　ナリタイ　』の一説にも繋がる。カラオケの発明者が単に特許制度のことを知らなかったので儲け損ねたというケースとは大分相違すると思う。

オリジナリティーという点では，醤油，わさび，山椒（葉だけであり，山椒の実は中国にもある。）は，日本のオリジナリティーである。

……等々の話しがあった。

そして，翌朝大阪城を案内したが，大阪城の石垣の大きさを強調した。

「江戸城とどちらが大きいのか？」と質問された。「石の大きさだけは明白に大阪城の方が大きいが，広さとか規模とかではどちらが大きいのか分からない。」答えるのがやっとであった。

国際交流は中々難しいものであると思った。それは，私の頭の中に突き刺さった棘として残った。

それから何年か過ぎた。そして，パテント編集委員会の委員になって，弁理士会に行くついでに，江戸城に立ち寄った。そこで，江戸城の石が大阪城に比較して余りに小さいのでビックリした。

日本の権力者に君臨した両者の生き様が石垣の石の大きさに結集しているように思われ，興味が注がれた。特記すべきことは，豊臣秀吉が外国進出政策派であるのに対して，徳川家康は内政派であったという点であろう。豊臣秀吉は我子秀頼を後継にすべく甥の関白を殺したのに対して，徳川家康は，家の安泰のために正妻築山殿と長男松平信康を亡き者にした。身内を粛清した点で共通するが，理由は大きく相違し，秀吉には，秀頼かわいさの親馬鹿ばかりで大儀大義名分はないと思う。

なお，日本の軍隊の外国進出に関しては，先ず最初に挙げられるのは，日本は，白村江の戦いで敗れ，白村江の入江を真っ赤に血で染めたことである。そして，豊臣秀吉の韓国進出である。亀甲船により撃滅され，海路補給を絶たれ退却する事態に至った。豊臣秀吉の韓国，元を破り世界制覇をする夢ははかなく消え，時世の歌『露と落ち　露と消えにし　吾が身かな 浪花の事も 夢のまた夢』が悲しく響く。さらに後には，西郷隆盛の征韓論に始まり，韓国併合，第二次世界大戦で日本の外国進出政策は破綻を来たす。日本は，海軍は強いと言われているが，明治維新前の日本軍は弱かったのかも知れない。東郷平八郎の東郷ターンは彼の独創ではないが，日本のオリジナリティー戦略として日本に存在したという事実が，日本必敗の常識を覆して，日露戦争勝利に繋がり，海外拡大戦略に火を注ぐ結果になった。

そして，世界大戦の敗戦まで突き進むことになった。戦後の経済戦争では，一時は世界 No.1 になったが，米国の IT 戦略と特許戦略の合わせ技に破れ，歴史的に視れば，初期の戦争に勝つことはあっても，最後は必ず負けるのが日本の悲しい宿命とも思われる。　（Tom Toc）